

体育局・文化局の軌跡

この十年を振り返って

本校における運動部・文化部のこの十年の変遷をふりかえると、平成七年度には体育局十五、文化局十二の部が活動を展開していた。当時、文化局には歴史研究会・クイズ研究会・JRC同好会・INCC同好会も名を連ね、熱意ある教員の指導と、生徒の主體的な活動に支えられた同好会活動が活発だったことがうかがえる。このうち、JRC同好会は現在もボランティア活動や募金活動を積極的に展開しており、INCC同好会も主にALTとの交流を中心に活動を継続している。

体育局では、女子の部・同好会の設立が相次いだことがこの十年の特徴的な出来事である。平成九年に女子バレーボール同好会が設立され、平成十四年には同好会としての五年以上にわたる活動が評価され、部への昇格を果たした。また、同じく平成十四年に女子バスケトボール同好会が誕生し、今日に至っている。その背景として、女子生徒の比率の

向上が挙げられる。平成七年度入学者二百九十四名中、女子生徒は百十六人（三十九・四％）であったが、年を追うごとに女子生徒の比率は向上し、平成十七年度入学生二百三十九名中、女子は百十五名（四十八・一％）となった。生徒の男女比が一对一に近付きつつある中で、今後も女子の部活動の活性化が進むことが予想される。

こうして、平成十七年度には体育局に十六、文化局に十三（弁論部が平成十一年度から復活）の部が名を連ね、「文武両道」の学校目標の下、各部が活発な活動を展開している。なお、平成十七年四月現在での部活動加入率は、一年生六十四％・二年生八十六％・三年生九十二％となっており、全体では八十二％の生徒が部活動・同好会活動に加入している。しかし、少子化の影響に本校も無縁ではいられず、本校でも平成十七年度入学者から一学級減となった。今後はこれまで以上に各部が部員数確保に頭を悩ますことが予想される。

さて、この十年における各部の活躍に目を移すと、体育局においては軟式野球部が平成七年・八年と二年連続で全国大会に出場し、平成七年には準優勝を果たした点が特筆される。また、平成十年には山岳部がインターハ

イに出場、縦走で第三位に入る健闘を見せた。近年では柔道部・空手道部・体操部が毎年のように秋田県上位の成績を収め、インターハイにも団体・個人においてコンスタントに出場を果たしている点が目を引く。また、文化部においては放送部・弁論部が近年全国レベルの活躍を見せており、弁論部は平成十三年から五年連続で全国高校ディベート選手権に出場し、平成十六年には準優勝を果たしたことは記憶に新しい。放送部もアナウンス部門・朗読部門において、連続して全国大会出場を果たしている。

硬式野球部の甲子園出場は平成四年夏以来遠ざかったままである。しかし、平成十七年春には平成四年以来となる春季東北大会出場を果たし、同年六月には羽黒高校（山形）と秋田商業という県内外の強豪校を招待して八十周年記念招待試合を実施した。秋田市内勢以外で四度の甲子園出場を果たしているのは県内では本校だけであり、五度目の甲子園出場の実現は本校関係者だけではなく、地元住民の悲願でもあろう。軟式野球部の全国大会出場も平成八年を最後に途絶えている。平成十七年には北東北大会まで駒を進めたものの、悲願達成はならなかった。平成十九年に迫る秋田わか杉国体では、能代市は軟式野球の大会会場となることも決定しており、地元・能代高校の出場・活躍が期待される。

全国大会出場記録一覧

I インターハイ出場記録一覧

(平成七年～十七年)

◎平成七年

〔団体〕

・柔道部女子

〔個人〕

・田村悠也・佐藤昭人組(男子ソフトテニス)

・中村寿史(体操)

◎平成八年

〔個人〕

・中村寿史(体操)

・畠山豊(体操)

・工藤博亨・渡辺俊一(男子ソフトテニス)

◎平成九年

〔団体〕

・体操部

・柔道部男子

〔個人〕

・畠山豊(体操)

◎平成十年

〔団体〕

・柔道部女子

・山岳部

〔個人〕

・佐藤寛仁・山須田健太郎・熊谷剛(柔道)
・児玉浩二・佐藤康一(体操)

◎平成十一年

〔個人〕

・花田早樹・金谷賢・半田美幸(柔道)

・児玉浩二・佐藤康一(体操)

・野呂裕太郎(陸上)

◎平成十二年

〔個人〕

・野呂裕太郎・大山晴喜(陸上)

・平川雄貴・大高実(体操)

◎平成十三年

〔団体〕

・柔道部女子

〔個人〕

・工藤秀樹(柔道)

・野呂裕太郎(陸上)

・平川雄貴(体操)

◎平成十四年

〔団体〕

・空手道部女子組手

〔個人〕

・高橋啓一・佐藤勇介組(男子ソフトテニス)

・平川雄貴(体操)

◎平成十五年

〔団体〕

・空手道部

〔個人〕

・山田優史・高橋弘太郎(体操)
・成田祐一(陸上)

・田森浩康・川村桃子(空手道)

◎平成十六年

〔団体〕

・体操部

・柔道部女子

・山岳部女子

〔個人〕

・半田幸輝・田中修平(柔道)

・高橋弘太郎(体操)

・牧野圭将(空手道)

◎平成十七年

・佐藤昭人（男子ソフトテニス 国民体育大会）

◎平成八年

・軟式野球部（全国高等学校軟式野球選手権大会）

・細田泉（全国高校柔道選手権）

◎平成九年

・荒川ますみ・佐々木瞳・関恵美子（全国高校柔道選手権）

・今立裕（国民体育大会）

・細田泉（国民体育大会 全国高校柔道選手権）

◎平成十年

・半田美幸（全国高校柔道選手権）

・細田泉・佐藤寛仁（柔道 全日本ジュニア選手権）

◎平成十一年

・空手道部（国民体育大会）

・陸上部（国民体育大会）

・無線部（全日本ARDF競技大会）

・新聞部（全国高校総合文化祭）

・菅原知佳子（全国高校柔道選手権）

・野呂裕太郎（陸上 ジュニアオリンピックク）

◎平成十二年

・体操部（国民体育大会）

・陸上部（国民体育大会）

・新聞部（全国高校総合文化祭）

・放送部（NHK杯全国高等学校放送コンテ

スト）

・無線部（全日本ARDF競技大会）

・伊藤春菜・金澤里奈（全国高校柔道選手権）

◎平成十三年

・体操部（国民体育大会）

・陸上部（国民体育大会）

・ソフトテニス部（国民体育大会）

・弁論部（全国高校ディベート選手権大会）

・佐藤愛美（NHK杯全国高等学校放送コンテスト朗読部門）

・工藤絢子（全国文芸コンクール短歌部門）

◎平成十四年

・弁論部（全国高校ディベート選手権大会）

・囲碁将棋部（全国高校囲碁将棋選手権大会 男子団体）

・成田巧（NHK杯全国高等学校放送コンテスト朗読部門）

・能登万祐子（NHK杯全国高等学校放送コンテストアナウンス部門）

・斎藤孝仁（全国高校総合文化祭囲碁部門）

◎平成十五年

・弁論部（全国高校ディベート選手権大会）

・能登万祐子・三浦綾子（NHK杯全国高等学校放送コンテストアナウンス部門）

・大山芽実（NHK杯全国高等学校放送コンテスト朗読部門）

・能登万祐子（全国高校総合文化祭アナウンス部門）

・水木亨（全国高校囲碁選手権）

◎平成十六年

・弁論部（全国高校ディベート選手権大会）

・囲碁部（全国高校囲碁選手権）

・杉渕有希（全国高校柔道選手権）

・鈴木ゆう紀（全国高校総合文化祭アナウンス部門）

・佐藤夏希（全国高校総合文化祭囲碁部門）

・大塚健（全国高等学校将棋竜王戦）

◎平成十七年

・弁論部（全国高校ディベート選手権大会）

・囲碁部（全国高校囲碁選手権）

に明け暮れた日々を過ごしていたような気がします(実際、そうだったのですが...)「全国優勝」を目標に日々練習に励み、チームメイトとは家族より深い絆でつながっていました。今の時代、高校生、いや、中学生までもが携帯電話を使い、コミュニケーションを取るご時世ですが、あの頃は本当に朝から晩まで、顔と顔を合わせ、喜びや悲しみや、つらいこと、悩み等を共有しながら、毎日を送っていました。

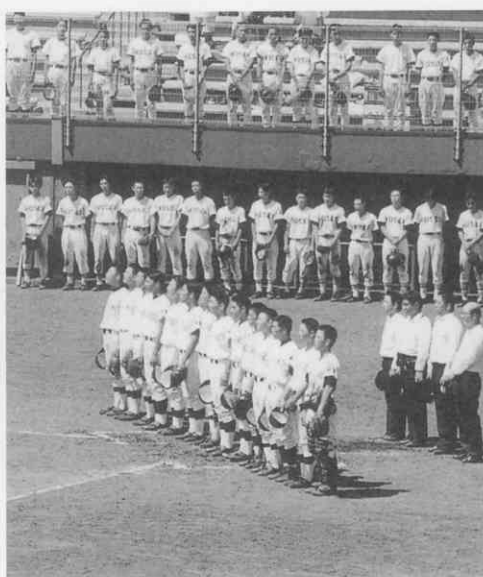
さて、高校時代を振り返ってみて、良かったと思う点と後悔している点があります。良かったと思う点は、軟式野球部の練習についてです。どうしても、学生時代というのは、受動的になりがちで、人にやらされているという意識が強くなりがちです。自分達の代が最上級生になった時、練習メニューや、試合のメンバーを、ある程度監督からまかせていただき、自分達で考えました。そうすることによって、責任感が生まれ、やらされているのではなく、自分達がやっているんだという意識が芽生え、つらい練習が百%以上、自分達の力になったような気がします。その結果、全国大会準優勝につながり、大きな喜びと満足を得ることができました。

後悔している点は、もっともっと勉強しておけばよかったと思うことです。もちろん試験のための勉強もそうですし、特に英語と読

書量の少なさに反省しています。

後輩達へ)

十代後半の高校時代は、楽しいことやつらいこと、本当にたくさんありました。しかし、高校時代の三年間というのは、本当に短く、あつという間です。あつという間の時間の中で、後輩のみなさんもたくさん思い出を作ってください。



◆山岳部

山と仲間達と私

六十九期(新制五十二期)

金平勝利

この度は能代高校創立八十周年おめでとうございます。今回執筆させていただくことを

大変嬉しく思います。

私達の山岳部は大変人数が多く、大会や合宿などの活動が活発でした。山について全くの素人だった私は、キャンプをたくさんできるかもという安易な気持ちで入部したので、この部活に大会があるということにびっくりしましたし、山の過酷さや大会で勝つための練習には慣れるまで時間がかかりました。正直言って最初の頃は辛かったです。しかし退部しようと思ったことはありませんでした。むしろそのような過酷な状況だからこそ、そこから生まれる友情や結束力は非常に強く、大きいものであり、私はそれに何度も助けられました。

また私達にはインターハイ出場という大きな目標がありました。惜しくも夢叶わなかった先輩達の涙を二度も見えました。なので私がキャプテンに任命されたときから、私は使命感のようなものを持って部活動に励みました。とはいえ大人数で、しかも個性派揃いな、この山岳部をまとめるのは容易ではありませんでした。というよりまとめた記憶がありません。部の先生にも迷惑かけてたことでしょう。自分が目標を追うあまり自分勝手になって、多少の衝突もありました。しかし、口では何だかんだ言っても、本当はみんな山が好きで、そしてこの能代高校の山岳部を好きな人間の集まりだったので、いざという時

のまとまりやパワーはすごかったです。大会では信じられないような力を発揮しました。練習の甲斐があり、鳥海山で行われた最後の大会ではなんとかインターハイ出場を決めることができました。ただし、学校からチームだけですので、嬉しい気持ちよりももう二度と全員で山に登れない寂しさの方が強かったです。共にがんばってきた女子チームの悔し涙も忘れられません。でもみんな私たちの結果を喜んでくれました。そしてがんばれと言ってくれました。本当に最高の仲間達です。

山岳部での三年間はまさに青春でした。思



い出も、共にがんばってきた仲間も全て私の大きな財産となっています。機会があればまたあの頃のメンバーと山に登ってみたいです。できれば若いうちに。

◆放送部

東北大会での思い出

七十四期(新制五十六期)

能登 万祐子

東北大会でのアナウンス原稿の条件は「詩」を取り入れた内容であることだった。私はこの条件にあう題材を見つけるのに非常に苦労していた。そんな時、幼稚園児のふとしたつぶやきを書きとめ、冊子にしている幼稚園があることを知った。そこで早速その幼稚園にインタビューに行くと、その冊子をつくるアイディアのもとになっていたのが「のはらうた」という詩集だとわかった。私はこの二つを関連させてなんとか原稿を書くことができた。大会の当日、私は普段の大会でもそうであるように緊張していた。しかしいつもマイクの前に座ると不思議と落ち着くのである。東北大会への出場は初めてだったので、予選が通ればそれでいいなと思っていた。それなので決勝進出者に自分の名前を見つけた時は本当にうれしかった。そして実際それで、満足

していた。そのおかげで決勝ではリラックスして自分の言葉を伝えることができたのだと思う。結果発表の時、自分の名前がなかなか呼ばれず、とうとう最優秀賞の枠だけ残った時、私の心を占めていたのは喜びよりも驚きであった。世の中何が起こるかわからないなと思った。それだけ全く予想していないことだったのである。

このような結果を残すことができたのは一人の力では無理であっただろう。インタビューを快く引き受けてくださった幼稚園の方や、ご指導くださった先生、そして共に放送部員として活動し支えあってきた仲間がいたからこそである。この場をかりて心から感謝の意を伝えたいと思う。

◆弁論部

全国大会に出場して

七十五期(新制五十七期)

藤田 大夢

僕は入部当初の頃はディベートがさっぱり分かりませんでした。先輩達がやっているのを見ても理解できず、あまり興味を持てませんでした。しかし、その年の全国大会で気持ちは一変しました。当時一年生だった僕は先輩に連れられて行ったのですが、会場で感じ

た雰囲気や先輩が活躍する姿を見て、自分も全国大会に出てみたいと思いました。

それから本格的にディベートの勉強をしました。最初は慣れないことに戸惑い、うまくいきませんでした。次第に論の書き方や話し方が身に付いてきました。そして、二年の夏、全国大会に選手として出場することができました。しかし、結果は予選リーグ敗退という悔しいものでした。その時、僕の目標は「全国大会に出る」ことから「全国大会で勝つ」ことへと変わりました。

三年生が抜けて新チームになり、僕は勝つために様々な事に取り組んできました。全国大会で優勝経験のある先生に話を聞きに行ったり、他県の学校と試合をするなど、今までやったことがない事に積極的に取り組みました。その結果、東北大会では三連覇を果たし、全国大会への切符を手に入れました。東北大会後は卒業した先輩からアドバイスを受けたり、東北の代表校と試合するなどして力をつけていきました。

そして迎えた全国大会。初戦はさすがに緊張しましたが、試合を重ねるごとにいつもの調子を取り戻し、白星を重ねていきました。試合に出る人も出ない人もそれぞれの役割を自覚し、「勝つ」という意識を持って戦った結果、なんと決勝まで進んだのです。何もできなかった僕が全国の頂点を争う場所にいる

ことに感動したのを今でも覚えています。敗れはしたものの、涙はなく、すがすがしい気持ちで僕は大会を終えました。

後輩のみなさん、全国大会で勝てたのはみなさんのおかげでもあります。自信を持って頑張ってください。応援しています。

◆放送部

金が物を言わない(時もある…)

七十五期(新制五十七期)

小松佳徳

卒業まで放送部員として所属していた私。とても楽しく、そして貴重な体験を数々としてこられたのも能代高校だからだと思います。

私が入部した二〇〇二年の春から、TV番組制作が始まりました。TV制作は未知の領域でした。カメラワークも分からず、編集機も十分に使いこなせませんでした。それでも初出品の作品が賞をとり、NHK(秋田放送局内)で放送されてしまい、これほど驚いたことはありませんでした。今思うと、この時のサプライズとほのかな興奮と矜持が、二年後の快挙につながったものと感じています。

放送部の予算は運動部と比べると「あれー」と言うくらい少なく、そのため、制作費はテープ代のみでした。全国大会で勝ち残る作品

は、巨額の金を注ぎ込んだものばかりで、私立の高校が毎回賞を取っていました。制作費千円で全国に勝ち残りたいという、公立高校放送部の意地とプライドを賭けて、番組制作に情熱を傾けていきました。

私の制作のコンセプトは「低コスト低カリリ」つまり、全体的にしつこくない構成と演出を練り込み、見終わった後、ほのかな爽快感をさりげなくおわせるという作品を千円で作るというものです。そのために、他校の作品を徹底的に研究し、現代が求めている作品を、最後の大会の作品として仕上げ見事全国大会で優良賞をいただきました。そしてNHKで全国放送されるという快挙を成し遂げました。予算が少なくても全国と渡り合えるということを確信した瞬間でもありました。

このように能代高校放送部TV制作部門の礎を築いた訳ですが、無鉄砲に、思う存分活動できる環境が能代高校にはありました。また顧問の藤田先生が存在があつたおかげで、こんなにも楽しい三年間で、なおかつ豪華な賞までいただけたものと悟りました。

これからは、能代高校生であつたことを誇りに思い、独創的な大学生になりたいと思っています。

◆女子バレーボール部

女子バレーボール部の現在

三年 明 平 真 代

平成十四年の能代高校の同窓会報である「松陵」において、昇格間もない女子バレーボール部は活動場所・時間・部員数、すべてにおいて不足がちであるという状況が紹介されていきました。

あれから四年たった今、練習場所は毎日第一体育館を使用できるようになり、部員数は三学年で二十人を超えるまでになりました。この飛躍的な活動環境の変化は、歴代の先輩方の努力と、支えてくださった多くの方々のおかげです。感謝の気持ちを忘れずに、コートに立てる喜びを胸に、常日頃の練習に励むよう、一層の努力をしていきます。一致団結し、良い成績を残せるように頑張りたいと思います。

◆女子バスケットボール同好会

我が同好会の現在

三年 近 藤 淳 美

女子バスケットボール同好会が設立されて

五年が経とうとしています。父兄の方々を始め、たくさんの方々を支えられてここまで活動を続けることができました。

この同好会は設立当初、三個のボールしかありませんでした。練習メニューを自分たちで決め、練習場所を確保したりと、大変な苦労がありながらも先輩たちが一年間継続して活動を行ったおかげで女子バスケットは愛好会から同好会へ昇格し、公式戦にも出場できるようになりました。

平成十七年度、私たちは県北大大会ベスト四、全県総体ベスト十六という成績を収めることができました。他のチームと比べると技術もレベルも低いかもしれませんが、私たちは能代高校のチームカラーを大事にしつつ、他のチームの良い点を見習いながら、活動を継続し、いつか「部」に昇格することを目標に、これからがんばっていききたいと思っています。

◆空手道部

インターハイ出場まで

三年 米 屋 美 吉

全県総体空手道競技は、地元能代の市民体育館で行われた。私たちの目標は宿敵・能代

商業を破り全県優勝することだった。

私が入学した時から、能代商業には敗戦が続いており、絶対勝ちたいという思いがあった。そのためにこの一年、私たちは瞬発力向上トレーニングを実施し、男子を相手に練習を重ねてきた。

大会が近くなるにつれて部内の空気が張りつめていき、私たちは日々練習に熱が入った。さらに気持ちで負けないよう何度もミーティングをして互いに励まし合った、

あおして試合当日は「強気」という言葉を胸に、一心に戦った。先鋒・佐藤は惜しくも敗れたが、次鋒・大倉はそれを帳消しにするような圧勝を決めた。続く中堅・米屋、副将・山田が辛勝し、大将・能登は敗れたものの三対二で、私たちは全県新人に続く勝利を手にすることができた。

しかし、これは私たちの力だけではない。三年間、夜遅くまでの部活動を許し、応援してくれた家族。空手道初心者の方たちを優しく、時には厳しく指導してくださった石崎先生や先輩たち、そしていつも練習相手になってくれた男子部員。多くの人のおかげで入学以来の夢だったインターハイに出場することができた。インターハイでは勝利を得ることはできなかったが、その目標は後輩たちに託し、これからの活躍に大いに期待したい。

平成十七年度
部活動所属人数・顧問名一覧

(平成十七年四月現在)

◎体育局

部名	顧問	人数	男子	女子
硬式野球	藤原 孝一 石井 勇悦 伊藤 康夫	41	41	0
軟式野球	腰山 岳大 今畠 寿樹 柏谷 浩樹	30	28	2
ソフトテニス(男子)	桜井 博文	23	21	2
ソフトテニス(女子)	浅野 宗和 佐藤亜希子	19	0	19
サッカー	一ノ関 拓郎 藤田 綾子	24	22	2
山岳	糸井 大輔	7	6	1
バスケットボール	工藤 聡	42	39	3
男子バレーボール	大倉 昌充	22	20	2
女子バレーボール	田口 琢央	21	0	21
卓球	牧野 俊彦 加藤 明子 高橋 真人	22	18	4
柔道		21	15	6
剣道	斎藤 淳一 芳賀 園子	19	15	4
体操	千葉 智	5	4	1

◎文化局

部名	顧問	人数	男子	女子
新文芸	関 道弥	10	8	2
演劇	鎌田 瑞枝 三浦 政博 銭谷真理子	9	2	7
吹奏楽	北条 明子	39	8	31
写真	赤塚 治	3	3	0
美術	三浦 益子	18	15	3
放送	兄玉 宗平 伊藤 睦子 藤田 一樹	18	5	13
無線	太田 研	7	0	7
無線	菅原 綾子 藤田 仁美	15	14	1
科	赤塚 治	16	16	0
囲碁・将棋		16	16	0

部名	顧問	人数	男子	女子
陸上競技	高田 邦敬 清水 和子	27	16	11
水泳	米谷 祥子	0	0	0
空手道	石崎 敦史 加賀 紀昭	29	21	8
応援	荒川 正明 藤田 一樹 八柳 英子	21	10	11
女子バスケットボール同好会	柴田創一郎	18	0	18



部名	顧問	人数	男子	女子
茶道	加茂 玲子	12	0	12
書道	岸 直子	19	2	17
弁論部	佐藤 英徳	19	9	10
JRC同好会	阿部 陽子	18	4	14
INC同好会	山信田理帆子 大野 雅弘	12	1	11